KAPPA NOVELS

長編小説

二進法の犬

花村萬月

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽一-一六-六
(〒112-8011)
光文社「カッパ・ノベルス」編集部

長編小説　二進法の犬（にしんぽうのいぬ）

1998年11月25日　初版1刷発行

著者　花村萬月（はなむらまんげつ）
発行者　濱井武
印刷所　豊国印刷
製本所　明泉堂製本

発行所　東京都文京区音羽1　株式会社光文社
振替　00160-3-115347
電話　編集部　03(5395)8169
販売部　03(5395)8112
業務部　03(5395)8125

落丁本・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取替えいたします。
© Mangetsu Hanamura 1998

¥1238

ISBN4-334-07316-6
Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

二進法の犬

淮阴工业学院图书馆
藏书章

カッパ・ノベルス

目次

第一章　家庭教師　5
第二章　白黒の犬　74
第三章　ちいさな変化　159
第四章　熱き冬　207
第五章　勝負　284
第六章　古都に散る雪　436
第七章　春、そして初夏　536
第八章　裂罅　600
第九章　血讐　657
終章　740
解説……吉野仁　748

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　家庭教師

1

文書ファイルのアイコンをプリンターのアイコンにドラッグ&ドロップすると、アプリケーションが起動する。ファイルが開き、印刷がはじまる。

つまり文書の絵をマウスでつまんでプリンターの絵の上にもってきて落としてやると、その文書の印刷が勝手にはじまるというわけだ。

こんなことはWindows95の基礎の基礎だ。

しかし、野際の奥様は眼を丸くした。さすがは鷲津さん、と媚びを含んだ眼差しでお世辞をいう。

鷲津兵輔は曖昧な笑顔をつくった。一週間前にもいまと同じことを彼女に教えた記憶があった。そのときも、奥様は眼を丸くして、大げさに感動した。

単なる金儲けだ。生活の手段だ。彼女が上達しなければ、そしてパーソナルコンピュータの操作に飽きはてることがなければ、それだけ収入が増える可能性があるわけだ。

だが、鷲津はいささか嫌気がさしていた。まったく覚える気のない、あるいは怠惰のあげく脳細胞が腐りはじめているとしか思えない脂っぽい中年女に軀を密着させられてパソコンの個人教授をするのは、いかに生活のためとはいえ、拷問に近いものがある。

鷲津は右肘あたりにめりこむ奥様のぶよついた乳房の感触に、なんともいえないおぞましさを感じた。しかし、感情を圧しころし、ディスプレイを凝視する。

ディスプレイはナナオの二十一インチだ。彼女に質問されて、ディスプレイは大きければ大きいほど見やすく、眼によいと答えたところ、翌週には定価

五十九万円也の巨大なディスプレイが〈パソコンのお部屋〉に鎮座していた。
鷲津自身のディスプレイは、価格と画面のバランスがいちばんとれている十七インチだ。とりあえず不満はなかったが、こうして奥様の二十一インチ、しかもディスプレイの超一流ブランドであるナナオを前にしてしまうと、なんとなく面白くない。
自分のアパートに帰って、自分の十七インチの画面を覗きこむと、おそらく微妙なせせこましさを感じるはずだ。画面の四隅のピントがやや甘いことに、そして表示された文字がどことなくにじんでいることに、軽い苛立ちを覚えるだろう。
「――さあ、もういちど、ドラッグ&ドロップを練習してみましょう」
「わたくし、もう、疲れたわ」
「やっとアイコンをつかめるようになったんだから、もうひとがんばりしましょう。Windows95は、同じことをするにもいろいろな操作方法が用意されているんです。ようやくアイコンをつかめるようになったのだから、いちばん楽で素早くできるプリントアウトの方法をマスターしてしまいましょう」
「アイコンなんかつかみたくないわ」
奥様がマウスを投げ遣りに動かした。モニターの中のカーソルが残像をのこしながら乱舞する。泣きたい気持ちを隠して、鷲津は笑顔をつくり、迎合した。
「さあ、もうひとがんばりですよ。奥様は勘のいい方だから、ダブルクリックも早々と覚えてしまったじゃないですか。こんどは、ドラッグ&ドロップですよ。これができれば、もうパソコンはマスターしたようなものですから」
「アイコンなんてつかんだってしょうがないわよ。どうせつかむなら――」
奥様は曖昧に語尾を濁し、含み笑いを洩らした。気のせいか瞳が潤んでいるようだ。鷲津は不気味になり、さりげなく顔をそむけた。
まちがいない。女の発情の匂いがする。鷲津は不安を隠せず、うかべていた笑顔が凝固して引っ込ん

でいくのをとめられなかった。奥様は腰の引けた男の雰囲気には敏感だ。表情を淡々としたものに変え、さりげなく訊いてきた。
「ねえ、鷲津さんはおいくつ？」
「歳ですか。二十七になりましたけれど」
「いいわねえ、二十七歳。ニシチのカブでしょう」
「奥様がそんなことを御存じとは、意外だ」
「このあいだ、お友達のお宅で、花札を教えてもらったの。もう、ルールなんて忘れちゃったけれどね」
「バカラといっしょ。たして九になればいいんですよ」
「あら、バカラってオイチョカブみたいなものなの」
「そうですよ。花札よりも覚えやすいでしょう。いまはバカラのほうが流行りじゃないですか」
奥様は鷲津の言うことを聞き流し、口を尖らせた。
「なんだかねえ、だまされたみたいなのよ」
「だまされた？」
「はじめだけどんどん勝てたんだけど、途中からボロボロにされちゃった。五百万円ぐらい負けちゃったのよ」
「五百万……」
「借用書を書かされちゃったんだけど、なんだか釈然としないのよね。取り返すために、もういちど勝負したほうがいいかしら」
鷲津は顎の先を弄んで考えこんだ。小田急線百合ケ丘遊園周辺はどちらかといえば新興住宅地であるが、神奈川県内ではかなり高級住宅が多いところとして知られている。
そういった土地柄、本職、いわゆるヤクザ者が絡んでいるということはないだろうが、なにも知らない奥様にギャンブルの味を教えこみ、五百万もの借用書をしっかり取るというのは、どう考えても臭い。
「奥さん。そのお友達という人は、どんな方ですか」
尋ねてから、いつのまにか奥様が奥さんになってしまっていることに気づいた。奥様は頓着せずに、

答えた。
「新しく引っ越してきたのよ。だんなは四十歳なかばくらい、奥さんは二十代後半くらいのご夫婦。子供はいないみたい。わたくしの家から緑地のほうに五分ほど行った丘の上に、百合ヶ丘御殿なんていわれているお家があるの。バブルのころに建てられたお屋敷よ。ずっと空き家だったんだけれど、このあいだ引っ越していらして、お付き合いがはじまったの」
　ますます、あやしい。しかし、軽はずみなことは言わないほうがいいだろうと鷲津は判断した。ただ、いちおう釘をさしておかないと、パソコン家庭教師の報酬を取りはぐれるかもしれない。
「ねえ、奥さん。花札というのは、がん札があたりまえなんですよ」
「がん札？」
「イカサマをするための花札です。がんをつけるって言い方、御存じでしょう？」
「正確なところはわからないけれど、睨(にら)むみたいな意味じゃないの」
「テメエ、がんつけやがったな、といったふうに遣(つか)いますよね。ほんとうは、イカサマをしようとしたって意味だと思うんですけどね。とにかく花札は、イカサマが多いんですよ。細工をしてあるんです」
「インチキかしら」
「そのお友達がインチキしたかどうかはわかりません。ただ、ざっとあげても、そぐり札、あつうす札、なが札、ざらすべ札、ひろ札、しみがん、けいりがん、とキリがないくらいイカサマ用の札があるんです。素人が軽々しく手をだすものではありません」
「じゃあ、わたくしは五百万払うの？」
「警察に駆けこみますか」
「いやよ、そんなの」
「旦那様に御相談したほうが」
「冗談じゃないわ。わたくしのへそくりでなんとかするわよ。でも、しゃくねえ」
　へそくりで五百万払えるのなら、なんら問題がない。鷲津は奥様に気づかれぬように歪んだ笑いをう

かべた。
それにしても、あるところにはあるものだ。時給二千八百円であれこれ教えるのがひどく馬鹿らしい気分になってきた。
「ねえ、花札がいけないなら、バカラっていうんだっけ？　そっちならいいかしら。バカラで取り返すわ」
「いいですか。トランプだって、札ですよ。がん札なんていくらだってあります」
「だめ……？　それにしても鷲津さんは詳しいわね」
「大学の卒論で、賭博史を選んだんです」
「学生時代からギャンブラー？」
「いえ、あくまでも研究課題として選んだんで、実際にやったことはないんです。妙な奴だって笑われますけど」
「ねえ、競馬なら中央競馬会がやっているんでしょう。インチキはないはずよね。なんとか取り返せないかしら。鷲津さんは馬券の買い方、わかるでしょう。つきあってくれません？」
「いいですか。競輪競馬も、麻雀も、ルールはわかるけれど、やったことがないんです。僕の場合は、あくまでも民俗学的アプローチであり、学問として選んだだけですからね。だいたい……」
「だいたい？」
「競馬みたいな選択肢が無数にある賭博は、絶対に儲けることができません。卒論を書くときに話を聞いたプロの博徒が、お馬さんは、いちばん馬鹿らしいって嗤ってましたよ。馬が疾るというスペクタクルやドラマを愉しむのはかまいませんけど、まだ、バカラのほうがましだ。博奕で御飯を食べる本物の博徒は手慰みに馬券を買うかもしれないけれど、絶対に深入りしません。だいたいにおいてほんとうのプロというものは、丁半といった勝ち負けが二分の一の確率の賭博以外やらないものなんです」
奥様は肩をすくめた。鷲津も、もうパソコンを教える気をなくしていた。ディスプレイから視線をはずし、ぼんやりと窓外を眺める。多摩丘陵の緑が眼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に沁みる。
陽射しはきついが、室内は肌寒いくらいだ。二重サッシなのでほとんど外界の音はとどかないが、蜩がカナカナカナ……と姦しく啼き騒いでいるはずだ。
憂鬱というのも大げさだが、なんともいえない気怠さがある。もうじき、夏も終わる。この強烈な陽射しは、夏の最後のあがきだ。鷲津はエアコンの幽かな唸りを意識しながら、漠然と窓外の透明な夏を見つめていた。奥様が独白した。
「なんで、たして九、なのかしら」
鷲津は我に返った。どうやら奥様は、オイチョカブのことを言っているらしい。鷲津は外を見つめたまま、いいかげんに応えた。
「なんでって、十進法だからでしょうね」
「パソコンは二進法っていうんでしょう？」
「ええ。一と〇。在ると無い。白と黒」
「なんか、さっぱりしていいわよね」
「そうですか？　デジタルの味気なさって、あると思うんですけど」
「……ねえ、他にたして九が勝つ賭事ってあるの？」
「たして九ですか？　そうですね。中国では骨牌を使う牌九があります」
「パイチュー？」
「牌が九で、パイチューです」
「いいわね、それ。もういちど、言って」
「牌九、ですか？」
「パイチューして」
「え――」

*

手の甲で額に浮かんだ汗を拭う。夏はたしかに盛っていたが、その陽射しの芯には微妙な遠慮のようなものが感じられた。その遠慮の気配は、秋の先駆けとでも名づけるべきものだ。
鷲津は吐息を洩らす。腰が懈い。俺は意地汚い男だ……と、うつむく。ご贈答用のボンレスハムのよ

うな軀をした野際の奥様を抱いた。自分をころして、奉仕した。

それにしても、あの奥様の相手をできるのだから、俺もたいしたものだ、怖いもの知らずだ。そんな自嘲を胸に、鷲津は、奥様から五百万せしめたという百合ヶ丘御殿のある百合ヶ丘緑地に向かった。

途中の古い民家の庭先の向日葵が千涸らびて枯れていた。中途半端に腐敗した植物の青臭い匂いがした。そんな澱んだ空気の中を、控えめな緋色がかすめた。

赤蜻蛉だった。一匹しかいなかったが、陽光を受けた羽根が茶色っぽい黄金色に輝いた。鷲津は立ちどまり、赤蜻蛉の軌跡を追った。赤蜻蛉は枯れた向日葵の傍らの竹垣にとまって、小首をかしげた。

おそらく古い農家なのだろう。納屋から筵を運びだしている老婆が鷲津に向かって柔らかく微笑んだ。鷲津は首をすくめるように会釈をかえした。

だらだらとした登りが続く。3ナンバーの高級車が鷲津をかすめるようにして走り去った。黒塗りだった。暑苦しい色彩だ。色彩だけでなく、実際にエンジンとエアコンの熱気をたっぷり鷲津に浴びせかけていった。

鷲津は乾ききった唇を舌先で湿らせながら、清涼飲料の自販機がないかあたりを窺った。

あたりは不動産の区分けでいう第一種住専区域だ。商店らしきものは一切ないし、自販機も見あたらない。鷲津は粘つく唾を黒い路上に吐いた。俺はよけいなことをしているのかな……そんな徒労感が襲った。

百合ヶ丘御殿は俗っぽくセンスのない、純白の連れ込みホテルのような趣の建物だった。鷲津は失笑して、その前に止まっている車が先ほど自分を追い抜いていった黒塗りの高級車であることに気づいた。

通行人のふりをしてさりげなく窺っていると、運転席から角刈りの若者が走りでた。後ろのドアを丁寧に開く。あらわれたのは、黒いスーツにノーネクタイ、白いワイシャツの胸をはだけたサングラスの男だった。

同時に百合ヶ丘御殿から金のネックレスをした主人らしき男があらわれ、門の電子ロックを解除した。主人は過剰なくらいに軀を寄せて黒スーツとなにやら親しげに会話を交わしながら室内に消え、角刈りの若者は車を地下駐車場らしいスロープにすすめた。

百合ヶ丘御殿の前の道は坂の頂点なので、あとはだらだらと下るだけだ。鷲津は男たちが消え去った門から曖昧に視線をはずした。精一杯のさりげなさをつくって坂を下っていく。

この坂を道なりに下っていくと、百合ヶ丘遊園駅に行くにはかなり遠回りになってしまう。しかし、いまきた道をきびすを返すようにもどるのはなんとなく躊躇われた。

あの純白の屋敷に姿を消した男たちは、どうみても堅気ではない。関わりにならないほうがいいにきまっている。鷲津は得体のしれない胸の昂ぶりを覚えながら、心のなかで首をかしげた。

そもそもヤクザ者が出没するのは、盛り場ではないか。こんな高級住宅街に事務所をもつとは考えづらい。それほどの利権が絡む場所とも思えないし、なにより不便だ。

まさか見張られてはいないだろうが、散歩をしているように見えるように、足早にならぬよう気を配りながら、鷲津は考えた。

バブル崩壊後、なんらかの理由でヤクザ者があの白いお屋敷を手にいれたのかもしれない。そして、ただ遊ばせておくのも無駄であるから、周辺のいわゆる有閑マダムを相手に賭場を開帳している。

鷲津は自分の推理に酔った。なかなかだと思った。野際の奥様のように五百万もの負けをへそくりで払って、何もなかったことにしようとするくらいの経済力がある家が周辺にはかなりあるのだから。

うん、うん、と二度頷いて、馬鹿らしくなった。俺の知ったことではない。そんな気分だ。奥様にはそれとなく百合ヶ丘御殿に近づかぬように釘をさしておくつもりだが、それ以上のことをする気はない。

尿意を催した。あたりは最低でも百坪ほどの敷地をもつ住宅が立ち並んでいる。鷲津は行ったことも

ない神戸、六甲の高級住宅街を思いうかべた。きっと、こんな景色なのだろうと勝手に納得して、人目につかぬ物陰を物色する。

二十メートルほど先の屋敷のコンクリート塀に、うまい具合にくぼんでいる部分があった。それは、電力計やガスのメーターなどが集中して設置されている場所のようだった。

鷲津はさりげない顔をして近づき、確認した。検針員を屋敷の中にいれずに、外側で処理させようとつくられたほぼ正方形の塀のくぼみだ。鷲津はそこに軀をねじ込んで、チャックをおろした。

小便は白っぽいコンクリート塀を黒く派手に濡らしたが、コンクリート自体が日光を吸収して熱をもっているせいだろう、即座に乾いて大雑把な年輪のような模様を描いた。

こんなに陽射しがきついのに、放尿しおえると胴震いがおきた。鷲津は倦怠に近い脱力感を覚えた。ヤクザ者を眼にしたときに感じた昂ぶりも去り、いいかげんにあくびを噛みころした。

ほんのわずかばかりのみじめさと、解放感があった。解放感は居直りからきていた。犬の気分だ。野良犬だ。見せかけの自由に、大量の不自由が覆いかぶさっている野良犬の自由だ。

あたりには、まったく人影がない。白っぽい陽の光に満ちている。遠近が微妙に歪んで感じられ、なんともいえない非現実感につつまれている。鷲津は先ほどまで自分の分身をつまんでいた指先を、なんとなく顔の近くにもっていった。

指先からは野際の奥様の残り香がした。鷲津の分身に染みこんでいた奥様の軀の匂いが、指先に移ったのだ。鷲津は苦笑した。芳香とは言い難いが、妙に懐かしい匂いだった。

うっとり匂いを嗅いでいる自分に気づいた。ほんとうに犬になったような気がした。鼻から指先を離し、じっと見つめた。爪が伸びている。キーボードを叩きづらかったわけだ。帰ったら、爪を切ろう。

鷲津は放尿現場からさりげない顔をして離れ、チノパンの臀ポケットに手を挿しいれた。汗で湿った

札の手触りを確認する。野際の奥様にご奉仕して、三万円。なんともせせこましい話だ。

だが、これで、ひと息つける。鷲津は自嘲の笑いをうかべた。しばらくして不安になった。ひょっとしたら、俺は独り言をしているのではないだろうか。

別れた彼女、正確には逃げた彼女は、心底から嫌そうな顔をして、あなたはいつだって独り言をしている、と吐き棄てるように言ったものだ。あなたは現実を生きていないのよ、とも言った。

つまり、京都の国立大学をそれなりの成績で卒業し、大手出版社に就職したにもかかわらず、一年もたたないうちに退職してしまい、高校生相手の家庭教師や、大学時代にデータ処理をこなしているうちにはまりこんでしまったパソコンの個人教授をしてかろうじて糊口をしのいでいることが彼女は気に喰わなかったのだ。

それはともかく、独り言をしているという指摘は、自分の孤独を見透かされたような気がしてかなり烈しい羞恥と嫌悪を覚えたものだ。だから、独り言を排除しようと意識的に自分をコントロールしてきた。

しかし、独り言とは、ほとんどの場合、無意識のうちに発せられるものだ。独白を意識することもあるが、たいがいの場合は、無意識のうちに喋っている。

つまり、自分が独り言をしていたかどうかは、いつだってはっきりしない。だから独り言をやめようという試みは、成果がはっきりしないまま、曖昧に臀窄(しりすぼ)みになっていった。

鷲津には確信があった。いちばん始末におえないのは、自分自身だ。正確にいえば、自分の無意識だ。自分が喋っていることさえ、意識しえないのだから。

鷲津は手の甲で顎の下から首にかけての汗をぬぐった。ねっとりと絡みつくような汗だった。自分がすべての汗腺から嫌な匂いのする粘液を垂れ流しているかのような錯覚がおきた。

坂を下りおえると、片側二車線の県道に至る。もっとも道がいいのはここから数キロだけで、そこから先は昔ながらのせまく曲がりくねった道になる。

鷲津は県道を逆に引きかえし、百合ヶ丘遊園駅に向かった。ダンプなどの工事用車輛が白い土埃をまきあげて走り去っていく。そのたびに息をとめて埃を吸わないようにするのだが、やがて口の中で砂や土埃がごくちいさな、しかし嫌な軋み音をたてるようになってきた。

歩道橋の先にある酒屋の自販機で缶ビールを買った。缶の縁を口にあてて、ふと思った。この苦みばしった液体を流し込むと、舌にのこった野際の奥様の味が消えてしまう。

我に返って苦笑する。奥様の味もなにも、いまや口の中は土埃でいっぱいだ。鷲津はビールをひと息に飲みほした。ふう……と吐息をつき、思案した。

一缶でやめておくことにした。すぐにゲップがでた。アルミ缶を握りつぶし、うつむき加減で歩きはじめる。

発情していた。ひどく発情していた。生臭い香りのする野際の奥様に吸いついて、舌を挿しいれ、犬のように舐めた。眼をつぶって別れた彼女のことを考えながら動作し、かろうじて炸裂させた。

奥様は一度では満足せず、連続して動作することを鷲津に求めた。鷲津は妄想に逃げこんで萎えそうな自分を奮い立たせ、さらに時間をかけて奥様を乱れさせ、二度めの終局をどうにか迎えた。

それなのに、ふたたび、発情していた。股間の触角が硬直しきって、歩きづらいほどだ。鷲津は絶望的な苛立ちを覚えた。路上である。始末におえない。解消しようがない。

あたり一面に得体のしれない悪意が立ちこめているような気がした。天の悪意だ。空の悪意だ。雲は真夏の入道雲に若干のすじ雲をまぜて、すましている。

俺はいったい何に対して発情しているのだろう。鷲津は途方にくれた。対象のはっきりしない勃起ほど始末におえないものはない。鷲津は男に生まれたことを呪った。

それでも百合ヶ丘遊園の駅ビルが見えてきたころには、衝動はおさまっていた。駅ビルのトイレで自

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com